

十河信二講演録要旨(西条中学第二回卒業生、元西條市長。元国鉄総裁)

昭和四十二年十月西条高校体育館落成記念式にて

みなさんおめでとう。こんなめでたいことはありませんね。「人生七十 古来稀なり」。ところが七十にもなると段々衰えてきます。しかるに、我西条高校は年と共に益々発展し、益々向上するんです。そうして七十年目にこんな立派な体育館ができました。私は、このめでたいお祝いに里帰りをするつもりで出て参りました。

今、校長先生から有り難いお言葉を頂いて恐縮しております。

西条というところは、私は日本中でも稀に恵まれた土地だと思います。霊峰石鎚、私はこの学校の在学中に二回、石鎚山へ登りました。あなた方、お登りになりましたか。登る時は、「六根清浄」声高らかに叫びながら登って行くんです。六根と言うのはなんでしょうか。

皆さんご存知のように眼、耳(じ)、鼻(び)、舌(く)、身(からだ・肉体)、それから意(こころ・精神)、この六つが六根なんです。六根を清浄するっていう目的で登りました。

鼻では我々が生きていく上に必要な空気を呼吸しますね。それから、あなた方 毎日、うまいものを口から食べているでしょう。そうして、肉体を健全にしているんです。鼻と口は肉体の栄養素を吸収するんです。

それから、眼はあなた方毎日、いい聖人、賢人のあるいは偉い人の書いた本を読むでしょう。その他万般の為になる勉強をするでしょう。耳からは校長先生始め、諸先生から、あるいは諸先輩から良いお話を聞くでしょう。

眼は、耳は、心・精神修養の、精神の栄養素をここから摂取するんです。健全なる精神がなければ健全なる肉体はできないのです。健全なる肉体には、健全なる精神が宿るのです。肉体と精神いうものは離すことのできないものなのです。

先だって、東京の私は近衛一連隊のあったところに行きました。そこに武道館という立派な建物ができております。そこで、国際的な柔道と剣道の試合がありました。外国人がこのごろみんな柔道や剣道を勉強していますよ。

あなた方はね、余程努力しないと外国人に負けますよ。その時に、外国人がどういうことを言っていたかと言いますと、「日本の剣道とか武道とかいうものは、体を訓練するだけだと思っていたらそうじゃない。精神の鍛練だ。我々はこれからおおいに剣道、柔道を勉強しなければいけません。」こう言って出席した外国人が異口同音に話しておりました。

このあいだ、福岡でみなさんも新聞でご覧になったと思います「日本の近代化について」

という国際的な研究会がありました。その時に『日本は物質的には、経済的には肉体的には非常に発展した』と、さて『精神的にはどうか』という疑問が一部の外国人から話されましたよ。

諸君は毎日「うまいものをね、食わさない」と言ってお母さんやなんか文句を言うですよ。きつと言っているに違いない。言っているような顔をしてるよ。ん？どうだ？そういう肉体的な栄養素については非常に心がけると、それは決して悪いことではないんですよ。肉体を健全にするっていうのはいいことですよ。しかしそれと同様に、あるいはそれ以上に諸君は精神の栄養素を吸収しておるでしょうか。先生の教えを守っておりますか。私自身、実はそのよく守らなかつた。それで身に覚えがあるから 諸君にね、先輩としてこういうことを申し上げるんです。

この精神的な栄養素の吸収が足りないとすね、日本はエコノミックアニマルだと、経済的な動物だと、有名な外国の雑誌が日本人をそういう風に批評しましたよ。そういう批評をされてはかなわん。実際はそうでない私は信じております。

世界的な哲学者にガブリエル・マルセルというフランス人がいます。このフランス人は先だって二度目の日本にやって参りました。

最初に来たときには、私がちょうど国鉄総裁をしておりましてので、私はこういう世界的な哲学者は日本国のお客さんとして大切に待遇しないといけないと思いましたが、私自身が松島だとか京都だとか奈良だとか方々を案内しました。

この間来たときにも私のところへ電話をかけてくれました。あいにく私は留守で、帰って来てからお宿に電話したら旅行中で留守だったんです。ところがその後、マルセル博士から電話がかかってきて「もう明日出発するから、ぜひおまえに会いたい。」と言って、私は誘われましたからお宿へ伺いました。そのマルセル博士は私にこういうことを言われました。「自分は日本を視察して、日本文明の基盤というものを初めてわかった。」と。

京都の修学院を見物した時に修学院のお庭は人間が造った、庭師が造ったその立派なお庭です。そのお庭は非常に綺麗だったと言って喜んでいました。そのお庭からずっとこちらへ来ると、そこに低い生垣があります。ちょうどこの頃のように雨が降るので蛇の目の傘を差して見物したんです。

その時にマルセル博士がいつまで経ってもここから洛北の街や森、あるいは山や川を見ているんです。家の中に入って休もうとしないんです。「博士、どうですか。少し休みなしよか」と言ったら「いや、これはいいところだ。」と、「この人間の造ったこのお庭と神様の造ったこの自然とがびつたり一致して融合している。日本の神道は神人一如だ」と。

「神様と人間というものは同じだ」と、「人間の中に神様がいつもここに来てね、諸君と寢食を共にしておられる。」なるほどそうだなと、人間の造ったこのお庭と神様の造った自然とがこれにびったり融合している。「英語のネイチャーズというのは、人間と対立した自然をネイチャーズと言う。日本で自然というのは、その中に人間も含まれているのだ。神人一如、それがその日本の自然という意味だ。」と、そういうことを言われました。

それで、その日本の信仰を基幹にした社会に新しい文明が起こらないと世界は平和にならない。時にご覧なさい。至るところで戦争が行われております。戦争までに至らないところではですね、分裂して抗争しておる。日本国内でもそうでしょう。政党で派閥抗争のない政党がありますか。至る所にね、憎みあい、至る所にね、争いがある。どこにいったい平和があるか、どうしてもこれを平和にしなけりやならん。

それには、この日本の昔からの伝統的な神人一如、仏教で言いますと、ことごとく仏性あり。みんなあなた方、みんな仏様になる資格があるんです。そういう性格をもつて産まれてきてるんです。そういうその昔からの伝統的な思想・信仰が我々に宿っておるんだ。その日本人が財産のその信仰、その思想を基盤にして財産の信仰をつくらなければ世界は平和にならないのだと。

この間、私のところへニューヨーク大学のルイスという教授が訪ねてきました。私は今、アパート生活をしております。台所、兼居間、兼書齋、兼客間、兼仏間、兼神棚など何もかもみんな一緒になってるんです。そこヘルイス博士を案内したんです。約二時間話をしました。

そこにその明治神宮のお札がかかっていた、「あれはなんだ。」と言う。「あれは、我々、神国の日本の守り神、神様のお守りだ。」と言う。その隣に仏壇がある。過去帳を開いてある。「あれはなんだ。」と言う。「あれは仏教の仏様だ。先祖代々の霊をお祀りしている。」日本には、その天照皇大神以来、我々のその祖先をお祀りしている神様だ、神国である。そこへインドで始まった仏教というものが入ってきた。

世界は民族、あるいは宗教、党の違ふことにみんな争っておる。ところが我々の大親、我々の祖先は神国である神様の国である日本に仏様がはいってきた。外国ならば必ず、革命が起こる、戦争が始まる。日本は何の戦争も起こらない、何の革命も起こらない。今日に至るまで我々の家にも神棚と仏壇というのはちゃんとする。昔を忘れない。祖先を敬い、神仏を尊存するという。そういうことが今日も残っている。これが日本精神だと、「なるほどなく。

この精神があればベトナムの戦争も起こらなかった。中東戦争も起こらなかったらう。どうもこういう国は世界には他にないぞ。」と言うことをルイス博士が感嘆して帰ってもらいま

した。後で、アメリカに帰るお土産ができたと言つて非常に喜んで電話をもらいました。

あなた方、西条にね、日本一の有り難いことがあるのをご存じですか。私は、当時、私は市長を拝命しておりました、西条市長を。その時に四国支社長が赴任してきたから、それで早速、高松に行つて支社長に会つて「支社長、あなたは西条に日本一があるつていうことをご存じですか。」と、「知らん。なんだね。」「そんなことを知らんでどうして四国の支社長が務まるのか。それじゃあ、拝ましてやるからこれから一緒に行こう。」と言つて支社長を連れて来て、そうして伊曾乃神社へお参りした。伊曾乃神社は、これは西条出身の大倉象馬先生がたくさんのお金と長い歳月を費やして日本中の権威者を集めて研究してくれたんです。その結果がですね、伊曾乃神社は、天照皇大神をお祀りしてあるんです。我々の祖先の祖先の祖先をお祀りしてあるんです。天照皇大神を氏神様に頂いておる国は、日本、どこにありますか。どこにもないんです。我が西条にだけあるんです。

日本精神、日本の古来の伝統的な精神、忠孝と言う。これを基にしてその上に築き上げた新しい文化ができれば世界は平和にならんのんです。人類はこれを超えることはできないと、世界的な哲学者のガブリエル・マルセル博士はそう言った。ニューヨーク大学のルイス博士もこれに賛成した。そうすればです、その天照皇大神を氏神様に頂いておるこの西条市は日本一の幸福な幸せものじゃないんですか。

世界を平和にする、人類を幸福にする責任はですね、あなた方西条高校のこの学堂で学ぶあなた方の責任ではありませんか。マルセル博士は帰る時に、「これからは日本人、お前たちの責任だぞ。」私の肩をひどく叩かれました。

昔のことを思い出すと、さつきお話のあった西条中学が独立した時、当時の西条中学の学生が『だし』をこしらえて飾りました。何を飾ったかと言うと、我々の飾ったのは、あの由緒ある校門の屋根の上に、竹と紙でこしらえた地球、地球をこしらえてそうして校門の屋根の上に飾った。

どういう意味かと言うと、この校門をくぐった者が世界をしょつて立つんだぞと、こういうことを忘れないように、そういう意味でこのだしをこしらえたんです。

私は皆さんの力で校長先生始め西条市民、県知事始め県民の皆さんのお世話でその立派な体育館ができたんです。この際に一つそういうことを皆さん思い直して、これから一つ肉体的な栄養素と同時に精神的な栄養素を多分に摂取して、そうして日本はおるか世界をしょつて立つ人間になって欲しいということを中心から念願致しましてお祝いの言葉に変えたいと存じます。有難うございました。